古典目録の編纂

曽根原 理

1. 古典目録の制作計画

昭和30年代の本学図書館は，新営本館建築計画に着手，LC 系分類表採用，記念史料室や調査研究室の設置への動き，欧米大学図書館との活発な交流など，多くの新機軸が打ち出された時代でした。そうした背景の中で計画された事業の一つに，古典目録の編纂がありました。

発端は昭和 36 年(1961)に，金谷治文学部教授(当時，以下の肩書等は全て同じ)を代表とする中国学関係教員有志から図書館に，中国書古典目録の編纂を要望したことです。館長補佐の原田隆吉助教授は，図書館「近代化」の中心はリファレンス・サービスの充実であり，蔵書目録はその根幹をなすものと考えていました。世良晃志郎館長は，原田助教授の見解をうけて，昭和37年11月の図書館例会において，本学の「和漢書古典目録」の編纂を指示し，同月の掛長会議で決定，12 月の商議会で承認されました。

昭和 38 年 1 月に発令された「和漢書古典目録編纂専門委員会」のメンバーは以下のとおりでした。各委員はこの後，古典目録編纂の方針を定めていく中心となるのです。

委員：世良館長，医学分館長(当初は村上次男教授，4 月から浦良治教授)，川内分館長(同じく峯岸義秋教授から白井俊二教授)，北住敏夫(文学部教授)，石田一良(同)，金谷治(同)，豊田武(同)，堀一郎(同)，亀田攷(同)，林竹二(教育学部教授)，高柳真三(法学部教授)，中村吉治(経済学部教授)，平山諦(理学部講師)，飯田須賀斯(工学部教授)，扇畑忠雄(川内分校教授)，佐川治(同)，平重道(川内東分校教授)，原田隆吉(図書館)，矢島玄亮(図書館和漢書目録掛長)

幹事：高木武之助(図書館事務長)，長尾公司(医学分館事務主任)，春日貞雄(川内分校分館事務主任)

2. 分類表をめぐる問題

古典目録の有力な編纂モデルは，京都大学人文科学研究所が刊行した『漢籍分類目録』でした。東北大学蔵書について，こうした目録を求めた中国学関係教員の要望から，この事業が始まったことは前述のとおりです。

さらにいうなら，東北大学には和漢書古典書の宝庫として，狩野文庫約 10 万 8 千冊がありました。狩野文庫の利用に関しても，検索に適した統一的な目録が無いため，学内教員はもちろん，学外の利用希望者からも，それを望む声が多くありました。そもそも，出納を担当する図書館職員は，いちいち基本カード目録(書架目録)をめくって，該当しそうな箇所を点検し見つけるのですから，大変な苦労でした。狩野文庫目録の作成を望む声は，図書館内にも強かったのです。

こうした状況をさらに複雑化した状況がありました。漢籍のみの目録を作る，あるいは狩野文庫のみの目録を作るということは，当時の状況でははなはだ困難でした。特定少数の利用者のため，大学として国家予算を使用することに対する抵抗が，強くあったのです。いきおい，この事業を成り立たせるためには，和書と漢籍とを問わず，学内の古典文献の網羅的な目録を作るという目標を掲げざるを得ませんでした。今から見るといかにもお役所的ですが，当時にあってはやむを得ない面がありました。そこでまず，問題になったのは分類表の方針です。

当時東北大学では，それまで一般的であった十進

法分類（Decimal Classification＝DC）にかわり，当時アメリカで採用する館が増えつつあった米国議会図書館分類表（Library of Congress Classification＝LCC）の採用を決定していました。そして上記の経緯をふまえ，当初の予定では和書と漢籍をともに，LCC 分類にしたがって配列し直す作業を行うことになりました。狩野文庫は狩野自身が定めた独特の分類を持っていましたし，それ以外の古典資料は本館独自の分類に従って配列されていましたので，それらを新たな分類表のもとに再編成するという作業が必要となりました。同一書をめぐり，関係教員の間で，「これは文学書」「違う，思想だ」といった議論がなされました。

しかしそれは，比較すれば多少の混乱にすぎませんでした。大きな問題となったのは，和書と漢籍を同一分類のもとに統合することです。漢籍には，伝統的に「四部分類」という分類法があり，全体を哲学書（経），歴史書（史），個人全集（子），編纂物（集）の四カテゴリーに分類します。中国学関係の研究者（中国など国外も含む）が日常馴染んでいるのは四部分類であり，先述の京都大学『漢籍分類目録』も当然それに従っています。

当初は不明瞭だったこの問題点が，作業の進行に伴い明らかになってきました。さらに，実際の書誌調査の水準が低かったこともあり（後述），結局昭和 41 年に和書と漢籍は“共通した傾向を残しつつも”別々の分類表を用いることになりました。

3. 実務段階の苦闘

編纂専門委員会の教員たちは，編纂方針を決定する役割であって，直接編纂作業を担当するわけではありません。図書館の職員が実務を担当するというプランもあり得たかもしれませんが，日常的業務に加えて担当することは困難であり，古典資料に関する専門知識が必要と考えられたことから，別に実務チームが作られました。

古典目録編纂は，当初は三年計画でした。実際は足掛け 20 年ほどかかったことを考えると，計画期間がずいぶん短く設定されていたように思われます。その理由は第一に，既存のカード目録を冊子体に直すという単純な作業を前提としたこと，加えて叢書（さまざまな書物を集めて一冊に編集したもの）から個々の書名を分離し目録に加える作業量の見積もりが甘かったことによります。さらに，たびたびの方針転換が作業効率を落とし，担当者の負担を心身ともに増大させたことも加える必要があるでしょう。そして，昭和 45 年前後の学生運動や，同時期の図書館の片平地区から川内地区への移転なども，負の影響を与えました。そうした中で実務にあたった人々の苦闘は，察するに余りあるものでした。

実務体制について述べるなら，まず昭和 40 年 4 月に非常勤職員として大学院博士後期課程の二名が雇用され，同年末には矢島玄亮（本事業のため 40 年 4 月から文学部助教授に転任）を編纂主任とする「編纂室」が編成されました。実務作業の中心は，既存のカード目録を複写し，新たに作成された分類表に従って配列し，書籍と照合して確認・訂正することでした。しかしながら実際に作業が始まると，カード目録の記載の不備（特に漢籍），叢書の割り出しが学部以下の学生アルバイトの手に余ったこと（旧字体漢字の知識など），現物の点検も院生アルバイトの手に負えなかったこと（書誌学的素養と訓練が必要）など，種々の問題点が明らかになりました。結局漢籍については，①四部分類を基準とし叢書割り出しは行なわない，②カードをもとにするのではなく現物から原稿を作成する，などの大幅な方針転換を前提に，中国学の教員が担当することになりました。結果的からいうなら“図書館には任せられない”ということです。また和書については，矢島助教授をはじめとする現場で解決せざるを得ず，時間がかかるのはやむを得ないという前提で作業が継続されました。担当者の間では実際に完成できるのかという疑問がぬぐえず，「ついには廃絶の道をたどるかもしれない事業に自己の全精力を傾注することはあまりに空しかった」という雰囲気であったといいます。「立案者が教員であること，その協力者が流用定員の助手であること，実務担当の主力が休暇期間の院生アルバイトおよび非常勤職員として雇用された専従者であ

ること」によって，図書館職員から見て，自らの事業であるという認識がどうしても曖昧になりがちなのは否めず，実務担当者の間で意気の上がらない日々が続きました。

事態の停滞は，一方で思わぬ形で援軍を得ます。すなわち，昭和 38 年から 47 年にかけて，岩波書店から『国書総目録』が刊行されたことにより，古典目録（和書之部）は校正作業において，またとない参照資料を得たのでした。読み方の分からない書名，分類に迷った書籍などについて，信頼できる参照資料を得たことは，実務担当者たちを勇気づけました。また，『国書総目録』に「著者別索引」が付けられたため，古典目録の索引は書名索引のみを作成することで切り抜けられたのでした。

4. 古典目録の完成と課題

昭和 48 年の 3 月，ようやく古典目録の原稿がほぼ出来上がりました。漢籍が 2 冊，和書が 3 冊という編成です（他に各々の索引で合計して全 7 冊）。

文部省ではこのころになると，東京大学東洋文化研究所の『漢籍目録』など，各大学の特殊コレクションの目録制作費を配分する方針が明確化します。古典目録は，一特殊文庫の目録作成が困難な状況下，東北大学全体の古典資料の目録化という形で事業を継続してきました。ようやく不完全ながら原稿の揃った時期に，狩野文庫目録の可能性が開けたことは，皮肉なことでした。しかし，もう古典目録として刊行するしかありません。

昭和 48 年度は，図書館の川内移転の年で，10 月末まで書庫の移転と整理が行われていました。そのため，予算がついたにもかかわらず，印刷所が仙台市内の笹気出版に決定したのは 11 月，刊行第一冊目の「漢籍之部・経史」の初校が出たのは 11 月 25 日，再校が出たのは翌年 2 月となっていました。こうした目録は，ミスが出やすい，それを見つけにくい性格を持つので，最低四回程度の校正が必要です。一方で，財源が国家予算である以上，三月末日までに完成させなければなりませんでした。第一冊は担当者の懸命の努力で，四校まで行いましたが，全部で二百頁程度なので可能という面がありました。その後はゆうに八百頁を超える巻が続き，三校がやっとであったといいます。

毎年刊行のためには，常に翌年度の原稿を作成しつつ，当年度の校正作業を続けなければなりません。後の時代と異なり，原稿は全て手書きです。当然，ミスもケタ違いに多くなります。当時，「担当者の机の上に校正刷の途切れる日はただの一日もなく，週末や年末年始の休暇も全くない」という状況だったと伝えられています。昭和 48 年度から 57 年度まで，印刷所も校正担当者も図書館の会計担当者も，死に物狂いの年度末を過ごしました。

こうして，ようやく全 7 冊の刊行が終了したのは，昭和 57 年 3 月でした。担当者たちは，充実感の一方で，誤植の多さに悄然としたともいいます。

しかしながら本目録の作成は，質量ともに日本の他の大学では類を見ないものでありました。『国書総目録』と，この古典目録の完成を契機に，東北大学の古典資料の豊かさは内外に知れわたり，多くの研究者が恩恵を被りました。目録の完成は研究の進歩をもたらし，研究の進歩がさらに進んだ目録の作成を促します。平成 2 年（1990）以降に丸善との共同事業として新たに狩野文庫のマイクロフィルム化が実施され，『狩野文庫目録 和書の部』全 11 冊が刊行されたのも，古典目録の基礎があったからと言えます。また，古典目録編纂を通じて培われた有形無形の遺産が，その後の東北大学図書館をめぐる様々な事業を生みだした点も，決して過小評価すべきではないでしょう。

【主要参考文献】

・新田孝子「『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』編纂事業について」（『図書館学研究報告』14，1981 年）
・原田隆吉「「東北大学所蔵和漢書古典分類目録」編纂・刊行の後に」（『図書館学研究報告』17，1984 年，後に同『原田隆吉図書館学論集』雄松堂出版，1996 年に再録）
・石田義光・高木忠・曽根原理「「狩野文庫目録和書

之部」成立の経緯」(『東北大学附属図書館研究
年報』28, 1995 年)

(そねはら さとし, 学術資源研究公開センター・
史料館助教, 附属図書館協力研究員)